

Commentary for the Historical Value of Tibetan *Biography of the Fifth Panchen Lama*

〈in Japanese〉

Feng Zhi (Jetanlobdan)

Professor, China Tibetology Research Center

〈Translated by〉

Manning Li

Research Assistant, Research Center for World Buddhist Cultures,
Ryukoku University

Abstract

In order to study the local political and religious history of Tibet during early Qing Dynasty, the author translated *A Biography of the Fifth Panchen Lama*, which was originally written in Tibetan. This biography records life of the fifth Panchen Lama, and important events of Tibet during his time, including governance of Qing central court towards Tibet during Emperors Kangxi, Yongzheng and Qianlong' reign. This paper makes summery, analysis and comments on historical materials of the biography according to different aspects. This biography is of great historical value, since it's the first-hand historical material on the life of the fifth Panchen Lama, local history of Tibet in early Qing Dynasty, as well as relationship between Tibet local government and Qing central government.

要 旨

清代初期のチベット地域における政教史研究に資するために、筆者は蔵文『パンチェン・エルデニ五世ロプサン・イエシエー伝』の漢訳作業を完成した。『伝』の中には、パンチェン・ラマ五世の一生の重要事績が記されており、特に当時のチベット地方で起こった一連の重大事件が触れられた。そのうち、清代初期の順治・康熙・雍正・乾隆の数代の皇帝と清中央政府がチベット地方に対して行った施政や管理事情の記述は少なくない。本論では、『伝』の中の重要史料に対し、様々な角度から選別・分析・評論を行い、『伝』の史料価値が極めて高いと指摘した。この伝は、パンチェン・ラマ五世の一生を研究する際のみならず、清代初期のチベット地方史、そしてチベット地方と清朝中央政府の関係を研究するにも重要な価値を有する一次史料であると考ええる。

蔵文『パンチェン五世伝』の史料価値について

馮 智（吉塘・洛丹平措）（李 曼寧 訳）

キーワード：パンチェン・ラマ五世、史料、評述

一、『パンチェン五世伝』の歴史的背景と基本内容

（一）伝記の歴史的背景

パンチェン・エルデニ五世羅桑益西（^{ロブサン・イエシエー}blo bzang ye shes、1663–1737）は、チベット史上において優れた業績を有する重要人物の一人であり、歴代パンチェン・ラマの中ではかなり長寿で、享年 74 歳であった。彼の伝記である『パンチェン・エルデニ五世ロブサン・イエシエー伝』（以下『パンチェン五世伝』と略称）に記されている内容が豊富であり、主に以下の幾かの面の歴史的背景に関わっている（*訳者注：本論における固有名詞の漢字表記は、同形異字の混同を避けるために、基本的に正字を使用する。また、蒙蔵地域の人名・地名等は、元言語が確認しかねる場合が多いため、基本的には漢字表記にし、元言語が確認できるものはルビを振る）。

一、この特定の歴史年代、特にダライ・ラマ五世阿旺羅桑嘉措（^{ガクワン・ロブサン・ギヤムツォ}ngag dbang blo bzang rgya mtsho、1617–1682）の時代は、モンゴル各部とチベットの政治・宗教・文化の連繫が最も緊密な時期であり、モンゴル各部の政教上層部は、チベットに入り参詣することによって、積極的に^{ダルク}格魯派（dge lugs pa）と関係を結んだ。特に^{アイルト}衛拉特（a'o rod）の^{トルゴト}土爾扈特部（thor god）・^{ジュンガル}準噶爾部（jun gar）・^{ホシヨト}和碩特部（ho shod）とチベット^{ダルク}格魯派の関係はこれまでにないほど密接であり、その影響は深遠であった⁽¹⁾。その内、モンゴル^{ホシヨト}和碩特部がチベットを支配したのは 75 年間（1642–1717）にも及び、^{ジュンガル}準噶爾軍がチベットを占領したのは 2 年 9 か月余りであった。

二、この時期は、チベット地域において、社会〔各階級〕の矛盾があちこちで生じる多事多難の時期であった。一連の重大事件は、すべて『パンチェン五世伝』においてある程度反映されている。例えば、チベット地域では、前後して、蒙蔵貴族の権力争い、真偽ダライ・ラマ転生者をめぐる争い、^{ジュンガル}準噶爾部のチベット侵攻、^{カロン}噶倫（bka' blon）内

(1) 清代初期のチベット地域とモンゴル各部の関係について、清代の大量の漢・蔵・蒙・満文等の文献と公記録すべてに記述があり、史料が豊富である。特に、チベット語の第三・四・五・六・七・八世の『ダライ・ラマ伝』と第四・五・六世の『パンチェン・エルデニ伝』の中には、大量な一次史料の記述がある。

紛の「阿爾布巴⁽²⁾の乱」〈*訳者注：噶倫、清代のチベット地方政府噶厦（bka' shag、「カシャ」とも）の大臣、ふつうは複数人がある〉、衛蔵戦争〈*訳者注：衛蔵、中央チベット。拉薩を中心とする衛（dbus）地方（「前蔵」とも）と日喀則を中心とする蔵（gtsang）地方（「後蔵」とも）で構成する〉、ブータンとチベットの間の国境紛争など、多くの事件が起こっている。

三、この時期は、チベット側が 1642 年に使者を派遣し、急成長した清王朝と関係を結んで以来、清中央政府との連繫が強化されつつ、清中央政府からもチベット地域に対する管理を固め、施政を完備させていく時期であった。

四、この時期において、チベットの格魯派と扎什倫布寺（bkra shis lhun po）は大きな発展を遂げた。1663 年より始まったのであるが、ダライ・ラマ五世が命令を下して、チベットの格魯派寺院に対し徹底調査を行い、格魯派寺院の定住僧の人数制限を定めた。例えば、布達拉宮（po ta la pho brang）は 50 名、扎什倫布寺は 3800 名、哲蚌寺（'bras spungs dgon pa）は 7700 名、色拉寺（se ra dgon pa）は 5500 名、甘丹寺（dga' ldan dgon pa）は 3300 名、昌都強巴林寺は 2500 名、大昭寺（gtsug lag khang ツクラカン〈*訳者注：通称「トゥルナン寺」〉）は 500 名、小昭寺（ra mo che ラモチエ寺）は 500 名であるなどを規定した。同時に、チベット地方政府は各寺院に対し、一定額の荘園領民と農地を配当した。統計結果によると、康熙三十三年（1694）に至って、チベットにおける仏教諸派の寺院は全部で 1807 寺があり、その内、格魯派寺院は 534 寺を占めている。95738 名の僧侶の内、格魯派の僧は 40187 人に及んでいる⁽³⁾。これらの数字は、格魯派集団がこの時期において極めて大きな発展を遂げたことを物語っている。

（二）伝記の内容構成

『パンチェン五世伝』の蔵文ペチャは、全部で 400 枚（803 面）である。『パンチェン五世伝』（蔵文）は上下二巻に分かれて、上巻の執筆者はパンチェン・ラマ五世羅桑益西^{ロブサン・イエシエー}であり、自伝である。下巻の著者はパンチェン・ラマ六世羅桑貝丹益西^{ロブサン・ベルデン・イエシエー}（blo bzang dpal ldan ye shes）であり、他伝〈*訳者注：他人編纂の伝記、「自伝」と対照。以下同〉である。

パンチェン・ラマ六世が『パンチェン五世伝』（他伝）の奥書に述べたように、パンチェン・ラマ五世の伝記は、水鼠年（1732）大師満 70 歳の時、神変節礼供等を挙行了したこと以前の事績は、パンチェン・ラマ五世自身によって撰して執筆された。即ち、1663 年から 1732 年前までの事績は自伝（上巻または上冊）である。それ以降のパンチェン・ラマ五世の事蹟は、パンチェン・エルデニ六世によって撰された。つまり、1732 年から 1742 年までの間の内容は他伝（下巻または下冊）である。

『パンチェン五世伝』蔵文ペチャの上・下巻の内容に基づき、西藏蔵文古籍出版社が

(2) 阿爾布巴、即ち全名は「阿沛哇多吉傑布」（nga phod ba rdo rje rgyal po、? - 1728）。

(3) 東嘎・洛桑赤列（gdong dkar blo bzang khirms legs）著、陳慶英漢訳『論西藏政教合一制度』民族出版社、2001 年、第 56 頁。

蔵文『パンチェン五世伝』を上・下二冊に分けて出版した⁽⁴⁾。上冊は『パンチェン五世伝』の自伝部分の内容であり、併せて13章である。下冊は『パンチェン五世伝』の他伝部分の内容であり、併せて9章である。今、筆者はすでにこの蔵文版『パンチェン五世伝』(上・下冊)を中国語に翻訳しており、近いうちに出版されることになる⁽⁵⁾。

二、『パンチェン五世伝』が言及する歴史的的重大事件

パンチェン・エルデニ五世羅桑益西^{ロブサン・イエシエー}が生きていた時代は、ちょうど、康熙帝が親政して中国統一の偉業を始めたところの重大な歴史的時期である。この時期はまた、清の中央政府がチベット地域の政務をコントロールし始め、全面的な管理が進んでいったという重要な歴史的段階である。いくつかの重大な歴史的イベントが『パンチェン五世伝』において反映されている。当時の歴史背景、特に清の中央政府の施政およびチベット地方に対する管理の推進過程を顧みると、当該伝記の史料価値そしてパンチェン・ラマ五世の歴史的業績と影響を更に深く把握することができる。

(一) パンチェン・ラマ五世の冊封

『パンチェン五世伝』の記述によれば、康熙五十二年(1713)、康熙帝が正式的にパンチェン・ラマ五世を「班禪額爾德尼^{パンチェン・エルデニ} (pan chen a'er te ni)」に冊封した。ダライ・ラマの冊封の例に準じて、金冊と金印を授けた⁽⁶⁾。それ以降、歴代のパンチェン・ラマの身分確立は、中央政府によって冊封しなければならないことが制度となった。実は、清は建国の初めの頃から、すでに、モンゴルやチベットの統治者と友好関係を結び、モンゴル・チベットで崇敬されている格魯派^{ガルク}の教主を身内に招くことで、清の統一偉業に服務することを戦略的国策の一つとした。順治十年(1652)、順治帝がダライ・ラマ五世を「所領天下釋教」の格魯派宗教的指導者に勅封し、これより、歴代ダライ・ラマの身分確立は中央政府の冊封を経なければならないことが制度となった。同時に、固始汗^{グシ・ハン}を「遵行文義敏慧固始汗」⁽⁷⁾という政治的リーダーに冊封した。これらの冊封を通して、チベットの政・教統治者が正式に清朝に帰属した。

(二) 第巴桑結嘉措^{サンギャ・ギャムツォ}と拉蔵汗^{ラサン・ハン}、ダライ・ラマ六世の関係

- ⁽⁴⁾ 2014年7月、西藏蔵文古籍出版社が『歴輩班禪大師傳記』叢書を出版した。全12冊で、そのうちの第3冊と第4冊は、即ち『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳(パンチェン・エルデニ五世ロブサン・イエシエー伝)』の上冊と下冊である。
- ⁽⁵⁾ 筆者は2015年初から2016年9月にかけて、二年弱の時間をかけて、一人で『五世班禪傳』(蔵文版、上・下冊)の漢訳を完成した。訳著は50万字近くになる。
- ⁽⁶⁾ 五世班禪羅桑益西^{ロブサン・イエシエー}著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(蔵文)(上)、西藏蔵文古籍出版社、2014年7月、第496-497頁。
- ⁽⁷⁾ 固始汗の名前は、「丹增却吉結布^{デンジン・チュウキ・ギェルポ} (bstan 'dzin chos kyi rgyal po)」である。

康熙二十一年（1682）、ダライ・ラマ五世が入寂し、第巴^{サンギェ・ギヤムツォ}（sangs rgyas rgya mtsho）が訃報を出さずにしてその事を隠蔽した時から、1720年清軍がチベットに入った時までの間に、チベット地域においては一連の重大な事件が起こっており、それらはすべて『パンチェン五世伝』において対応する記述がある。

その中でも、摂政桑結嘉措と拉蔵汗^{ラサン・ハン}（lha bsangs han）⁹との争いが最も目立つ。1703年、拉蔵汗が拉薩において、和碩特汗^{ホシヨト・ハン}（ho shod han）という王位を継いだ。拉蔵汗は抱負を抱いた精力的な人物で、彼は「和碩特部の長が権力を持っていないという状況に対し、もうこれ以上見るに耐えない」¹⁰）と思い、一心に「チベットにおいて、その祖先が一族のために獲得した統治権を復興したい」¹¹）と考えた。拉蔵汗は、ダライ・ラマ六世^{ツァンヤン・ギヤムツォ}（tshangs dbyangs rgya mtsho）が勉学を嫌って修行に煩い、比丘戒を受けたくないだけでなく、沙弥戒をもパンチェン・ラマ五世に返上しようとする、また自分がダライ・ラマの転生ではないと称し、摂政とパンチェン・ラマ五世の勧告・教化を受けないなどの情報を得て、ダライ・ラマ六世の奇抜な行為は拉蔵汗に巧妙に利用され、摂政との闘争に使われるものとされた。拉蔵汗は、即位した後、康熙帝に奏上し、ダライ・ラマ六世の行為が不正であると称して、その廃位を請求した。

また、摂政とダライ・ラマ六世との間の不和も、拉蔵汗に巧妙に利用される道具となった。1703年ある夜、ダライ・ラマが従者数人を連れて八廓街まで夜行したところ、突然十余人に襲撃され、従者中の一人が殺された。後に、ダライ・ラマ六世がこのことは摂政の指示が関わっていると責めて、摂政に対し、調査を行い容疑者を出すようにと要求した。この事件の後、ダライ・ラマと摂政の間に齟齬が生じた¹²）。その後、摂政桑結嘉措と拉蔵汗との不和は次第に激化し、康熙四十四年（1705）、摂政桑結嘉措は拉蔵汗に殺された。翌年（1706）康熙帝が拉蔵汗を「翊法恭順王」に冊封した。パンチェン・ラマ五世が卓尼爾^{ドン・ネル}（mgron gnyer 〈*訳者補注：「侍従」のこと。以下「侍従」に統一する〉）^{カチェン}（dka' chen）を拉薩に遣わし、拉蔵汗が冊封を得たことに対しお祝いと祝儀を送らせた。同年、拉蔵汗が奏上して、ダライ・ラマ六世^{ツァンヤン・ギヤムツォ}倉央嘉措を廃位し、別に益西嘉措^{イエシエー・ギヤムツォ}

⁸「第巴」はチベット語「sde pa デパ」の中国語音写である。清代初期格魯派地方政権において、ダライ・ラマを代理して政務管理を行う官員であり、また「第悉」「第斯」（sde srid デシ）ともいう（*訳者補注：「摂政」の意で、以下「摂政」に統一する）。一代目の摂政索南饒丹（bsod nams rab brtan）は、モンゴル和碩特部の固始汗に任命された。固始汗が亡くなった後、その子息たちの王位争いによって、和碩特部の勢力が衰弱し、ダライ・ラマ五世はその機に乗じて、摂政の任命権を接收・管理した。

⁹ 拉蔵汗は、当時、和碩特部がチベットにおける汗王である。

¹⁰ 伯戴克（Peteche Luciano）著、周秋有漢訳『十八世紀前期中原和西藏』、西藏人民出版社、1987年、第12頁。

¹¹ 杜齊著、李有義・鄧銳齡漢訳『西藏中世紀史』、中国社会科学院民族研究所、1980年、第140頁。

¹² 『康熙朝滿文朱批奏摺』、議政大臣鄂飛等の康熙四十四年十二月二十六日奏摺による。

(ye shes rgya mtsho) を「真」のダライ・ラマ六世として擁立した。拉蔵汗^{ラサン・ハン}はまた聖旨を奉じて、「偽」のダライ・ラマ六世倉央嘉措^{ツァンヤン・ギャムツォ}を北京まで押送しようとした。しかし、倉央嘉措は青海湖を通り過ぎていてところで病死した⁽¹³⁾。康熙四十九年（1709）、清の朝廷は、拉蔵汗^{ラサン・ハン}に立てられた益西嘉措^{イエシエー・ギャムツォ}を正式に「ダライ・ラマ六世」に冊封した。

(三) チベット出兵と準噶爾部の駆逐

『パンチェン五世伝』の中に、この歴史的事件が記されている。戦いが頻繁に起こり、パンチェン・ラマ五世が積極的にその間を斡旋し⁽¹⁴⁾、頑敵〈*訳者注：準噶爾軍^{ジュンガル}〉を駆除するための清軍入蔵を擁護した。

1717年、チベットが準噶爾部^{ジュンガル}に占領され、拉蔵汗^{ラサン・ハン}は殺され、益西嘉措^{イエシエー・ギャムツォ}が拘禁された。1718年、清軍がチベットに出兵し準噶爾部^{ジュンガル}を駆逐しようとしたが、不幸にも黒河^{ナクチュ} (nag chu 那曲) において全軍が全滅してしまった。1720年、康熙帝が第十四皇子允禔^{いんだい}〈*訳者注：当時の名前は「胤禔」であった。兄の雍正帝の即位後、避諱のために「允禔」に改めたのである〉を「撫遠大將軍」に任命して西寧に駐在させ、清軍を指揮して四川・青海よりチベットに入り、準噶爾軍^{ジュンガル}を駆逐せよと命じた。同時に、康熙五十九年（1719）、康熙帝が正式に格桑嘉措^{ケルサン・ギャムツォ} (bskal bzang rgya mtsho) を「ダライ・ラマ六世」に冊封し、さらに延信將軍に命じて、彼を布達拉宮まで送り即位儀式を行い、同時に拉蔵汗^{ラサン・ハン}に立てられたダライ・ラマ六世益西嘉措^{イエシエー・ギャムツォ}を廃位した〈*訳者注：格桑嘉措^{ケルサン・ギャムツォ}、今通称する「ダライ・ラマ七世」のこと。当時の清政府は、倉央嘉措^{ツァンヤン・ギャムツォ}と益西嘉措^{イエシエー・ギャムツォ}の正当性を認めなかったため、倉央嘉措の転生と見られた格桑嘉措^{ケルサン・ギャムツォ}を「六世」として認定したが、チベット地域においては、倉央嘉措^{ツァンヤン・ギャムツォ}は本当のダライ・ラマ六世であるという認識が根強いと、後の時代においてその順を是正されたのである。以下「ダライ・ラマ七世」〉。

(四) 行政管理とチベット駐兵

『パンチェン五世伝』の記述によると、1720年10月6日、清軍の武将とダライ・ラマ七世、青海の丹增王^{デンジン} (bstan 'dzin dbang、即ち羅卜藏丹津^{ロブサン・テンジン} (blo bzang bstan 'dzin) 親王) 等が代表者を扎什倫布寺に遣わし、大師に対し、拉薩までいらっしゃるように願った。10月10日、パンチェン・ラマ五世は布達拉宮^{ポタラ}の日光殿において、初めてダライ・ラマ七世と会見した。11月5日、ダライ・ラマ七世に沙弥戒を授け、法名「洛桑格桑嘉措^{ロブサン・ケルサン・ギャムツォ} (blo

(13) 『清聖祖實錄』卷227、康熙四十五年十二月庚戌条。この条の記述によれば、当時清の朝廷から派遣した西寧駐在の大ラマ商南多爾濟^{チャクナ・ドルジェ} (phyag na rdo rje) が自ら清朝廷に対し、「偽ダライ・ラマは、西寧口を通り過ぎたところで病死した」と報告した。理藩院はその上奏文の上に「商南多爾濟^{チャクナ・ドルジェ}に公文書を出し、その屍骸を捨てるようにする」という対処案を書き添えて上奏し、康熙帝がこれに同意した。

(14) 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(藏文)(上)、西藏藏文古籍出版社、2014年7月、第524-529頁。

bzang bskal bzang rgya mtsho)」を与えた。この間、パンチェン・ラマ五世は延信等の清軍武将に拝見し、摂政達孜^{タツツエネ}（全名 stag rtse ba lha rgyas rab brtan）などの、準噶爾部^{ジュンガル}に尽力していた罪人のために許しを求め、処罰を免れられるように請求した⁽¹⁵⁾。清軍がチベットの動乱を鎮めた後、清の朝廷が直接チベットにおいて施政し始めた。モンゴル汗王制と摂政制を徹底的に廃止し、「逐準保藏^{ジュンガル}（準噶爾を駆逐し、チベットを保衛する）」戦争に功績あるチベット族官員の康濟鼐^{カンチエンネ}（全名 khang chen nas bsod nams rgyal po）、阿爾布巴^{ガボバ}（全名 lum pa ba bkra shis rgyal po）、隆布鼐^{ルムバネ}（全名 lum pa ba bkra shis rgyal po）、扎爾奈^{チャラネ}（全名 sbyar ra ba blo gros rgyal po）の四人を選出し、噶倫^{カロレン}に任命した。チベット地方政府を建てて、彼等が共同でチベット政務を管理するようにした。同時に、大將軍允禔^{いんだい}等の大臣たちが奏上した意見を受け取り、四千人の兵士をチベットに駐在するように命じた⁽¹⁶⁾。そして、チベットの政局がすぐに安定したため、わずか一年程度で、察木多^{チャムド}（chab mdo、今の昌都）などの地においては千人の兵士を残して駐在させたが、その他のチベット駐在兵士が命令を奉じて内陸部へ撤退した。これ以降、清軍のチベット駐在が制度となった。

（五）駐藏大臣の設立とチベット政務管理の強化

『パンチェン五世伝』において触れられたもう一つの重大事件は、清朝の駐藏大臣の設置である。清はかつて、康熙四十八年（1707）に侍郎赫寿^{ラサン・ハン}をチベットに派遣し、「拉蔵汗と共同で政務を処理する」ようにしたことがある。これは、清朝廷が駐藏大臣を設置することの先触れであったと考えられている。1727年、清朝廷が〔文官の〕内閣学士僧格^{センゲ}（seng ge）と〔武官の〕副都統馬喇^{マラ}（m'a la）をチベットに派遣し、ダライ・ラマと康濟鼐^{カンチエンネ}等に協力し政務を処理するようにして、この時から駐藏大臣が正式に設置された。

1727年（雍正五年）、チベットでは「阿爾布巴の乱^{ガボバ}」が起こった。8月、阿爾布巴・隆布鼐^{ルムバネ}・扎爾奈^{チャラネ}等が康濟鼐^{カンチエンネ}を謀殺し、頗羅鼐^{ウー・ツァン}（全名 Pho lha nas bsod nams stobs rgyas）が挙兵して対抗した。双方が権力を争い、凡そ一年ほどに及んだ衛蔵戦争が展開した。1728年7月、頗羅鼐^{ウー・ツァン}が兵士を率いて拉薩に攻め込み、チベット地域の統治権を奪った。同時に、清朝も再びチベットに出兵し、内乱を鎮めた。これは〔清が〕チベットに対する三回目の出兵であった。

『パンチェン五世伝』の記述によれば、「衛蔵における戦乱を鎮めるために、雍正帝

(15) 五世班禪羅桑益西^{ロブサン・イェンシエー}著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』（藏文）（上）、西藏藏文古籍出版社、2014年7月、第559-564頁。

(16) 康熙六十年（1721）二月、大將軍允禔は、「チベットは既に平定したが、駐防のことは殊に重要である。今現在そこに駐在する者は、扎薩克蒙古兵^{ジャサク・モンゴル}五百名、額駙^{アボ}阿宝^{アボ}の兵五百名、察哈爾兵^{チャハル}三百名、雲南兵三百名、四川兵千二百名が居り、公策旺諾爾布^{ツェワン・ノルブ}によって総括的に管理されている」と奏上した。三月、清政府はまた雲南と四川から、それぞれ兵士五百名を調達してチベットに派遣した。これにより、チベットで駐在防犯する兵士は計四千となった。（『清聖祖實録』巻291、11-12頁）

が欽差大臣^{アリエンバ}阿黎安班 (a' li aim pa、当時の清軍統帥^{チヤランア}查郎阿 (khra lang a') を指す) 等を遣わして、[阿黎安班等が] 清軍数千人を率いて^{ラサ}拉薩に到着した。欽差大臣が特別に加爾果齊^{チヤルゴチ} (rjar go chi、侍衛) と馬老爺^{カシルンボ} (朝廷の駐藏官員、副都統馬喇のこと 〈*訳者補注: 「老爺」は尊称の一種) を^{ラサ}扎什倫布寺に派遣して、大師を^{ラサ}拉薩までお越しいただき、勅旨を受けように迎へに行った。大師が^{ラサ}出發して^{ラサ}拉薩に到着し、^{ボタラ}布達拉宮において^{ダライ}ダライ・ラマ七世と会見した。また、大師が「侍從^{サフエンバ}薩奎巴 (sa 'khon pa) を遣わして、^{カロン}摂政・噶倫等のために、欽差大臣たちに許しを求めた。しかし、国法は厳正であるため、もう挽回する手立てがない」⁽¹⁷⁾。

清の朝廷が「^{ガボ}阿爾布巴の乱」を鎮めた後に取り上げた施策は、チベット駐兵の規模を拡大するほか、チベットの政治体制に対しても少し調整を行った。主には、下記の三つがある。

一つ目には、^{ボラネ}頗羅鼐に対する褒賞。事件後、雍正帝は^{ボラネ}頗羅鼐を抜擢し、前後して「^{ベイセ}貝子」「^{ベイレ}貝勒」の爵位に冊封し、チベット全域の政務を総攬させた。そして、1740 年、^{ボラネ}頗羅鼐が^{ジュンガル}準噶爾部の侵攻を防いだ功績があるため、乾隆帝が^{ボラネ}頗羅鼐を抜擢して「郡王」の位を与えた。これは清朝がチベット上層に対して冊封した最高の爵位であった。^{ボラネ}頗羅鼐が「諭旨に遵奉」し、国の統一を擁護して、清の中央政府とチベット地方の関係がさらに固まって発展した。『パンチェン五世伝』には、パンチェン・ラマ五世と^{ボラネ}頗羅鼐の密接な往来関係が記されている。

二つ目には、^{カロン}噶倫内紛および^{ダライ}ダライ・ラマ七世の父の政務干渉のことを鑑み、清朝が^{ダライ}ダライ・ラマ七世を^{カム}康 (khangs) 地方の^{ムガルタル}泰寧 (mgar thar ガルタル) に移し、^{ムガルタル寺}恵遠寺 (mgar thar dgon ガルタル寺) を建立して、^{ダライ}ダライ・ラマをそこに住させた。また、^{ダライ}ダライ・ラマ七世の父を職務報告の理由で北京に召し、^{ダライ}ダライ・ラマ七世の権力を宗務の範囲内に制限した。『パンチェン五世伝』では、「これからまもなく、^{ダライ}ダライ・ラマ七世が聖旨を奉じて^{ボタラ}布達拉宮から^{リタン}出發して^{リタン}理塘 (li thang) に赴いた。大師が侍從^{ラサ}を^{ラサ}拉薩に遣わし、慰問の手紙や様々な贈り物を送った」⁽¹⁸⁾と記している。^{ダライ}ダライ・ラマ七世が聖旨を奉じて1728 年 11 月に^{カム}康地方に移住し、1735 年に至って初めて^{ラサ}拉薩に帰った。

三つ目には、清朝が分割管理の政策を採り、^{ムダ}康定 (mda' rtse mdo、^{打箭炉}打箭炉)、^{リタン}理塘、^{バタン}巴塘 ('ba' thang) などの地を四川省の管轄区域に帰し、^{ギェルタン}中甸 (rgyal thang 〈*訳者補注: 今の香格里拉市))、^{アツンツ}阿敦子 ('jol ジョル、今の徳欽県)、^{デチエン}維西 ('ba' lung パルン) などの地を雲南省の管轄区域に帰し、^{カシルンボ}扎什倫布寺以西、^{ガリ}阿里 (mnga' ris) 地方に至るまでの区域をパンチェン・ラマ五世に移管させると命じた。しかし、パンチェン・ラマは三つの宗 (県) の管轄権しか受け入れなかった。このことについて、『パンチェン五世伝』には、「清朝

⁽¹⁷⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(蔵文)(下)、西藏藏文古籍出版社、2014 年 7 月、第 126-130 頁。

⁽¹⁸⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(蔵文)(下)、西藏藏文古籍出版社、2014 年 7 月、第 134 頁。

官員が勅旨を読み上げ、扎什倫布寺^{タシルンポ}以上、岡底斯^{カンティセ} (kangs ti se) 山脈以下の区域すべて（即ち後藏^{グツァン} ツァン）地域および岡底斯山脈に至るまでの地）をパンチェン・ラマに与え、その香火領とするという。このことに対し、大師は、再三再四受領しがたいと示したが、勅旨に反することはできないので、最終的には、やむなく拉孜^{ラツェ} (lha rtse)・昂仁^{ガムリン} (ngam ring)・彭措林^{フンツォグリン} (phun tshogs gling) の三つの宗を受け入れた。その後まもなく、「司庫^{フン} (phyag mdzod チャクゼー 〈*訳者補注：資財を管理する者〉) 等が大皇帝（雍正帝）〈*訳者注：大皇帝、宗主国・清の皇帝に対する尊称〉から新たに賜った香火領各宗^{フン}の頭人〈*訳者注：長〉[権利]の移管手続きを行った」と記されている⁽¹⁹⁾。

要するに、清代初期の中央政府がチベット地方に対して行った重大な施政措置は、ほぼすべて『パンチェン五世伝』において一定の記述がある、またはある程度読み取られる。この理由で、『パンチェン五世伝』は、清代中央政府のチベット統治を研究するための重要な一次資料であると言える。

三、『パンチェン五世伝』の他の史料的价值

（一）扎什倫布寺研究の一次資料

『パンチェン五世伝』の史料的价值は極めて高く、この伝に基づき、概して言えば、これはパンチェン・エルデニ五世の一生を研究する重要な一次史料であるだけでなく、当時の扎什倫布寺ないし後藏地方の政治・社会・経済・宗教・文化などの多方面の歴史事情を研究する重要な資料でもある。伝は、パンチェン・ラマ五世時期の扎什倫布寺自身の発展史について、寺院組織、学経制度、寺院経済、寺院の増築、文物（仏像、仏経、仏塔と壁画）の収蔵・創造などの寺院文化および寺院の社会関係（内部関係と外部関係を含む）などを包括する諸方面から、重要な史料を提供してくれた。さらに、清代初期チベット地方の社会状況や歴史的発展、そして扎什倫布寺とチベット地方が周辺地域との往来関係、扎什倫布寺とチベット地方が清朝中央政府との関係などの研究において、いずれも重要な参考資料としての価値がある。

（二）パンチェン五世の生涯事蹟研究のための重要史料

『パンチェン五世伝』はパンチェン・ラマ五世の一生を研究する一次資料である。彼の一生を見通せば、その経歴が極めて豊かであり、政治・宗教における事蹟は殊にすぐれている。主には、以下の点を挙げることができる。

パンチェン・ラマ五世はその一生において修行を怠ることなく、広く法行をなす。著作は膨大であり、弟子は無数である。扎什倫布寺の発展と拡張を推進し、格魯派の深

⁽¹⁹⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(藏文)(下)、西藏藏文古籍出版社、2014年7月、第128—129頁。

遠たる伝播に影響を与えた。

1663 年 7 月 15 日、パンチェン・ラマ五世は、後蔵の托布結 (thob rgyal) の春倉村 (brul tshang) に生れた。父の名前は夏仲索南旺札 (zhabs drung bsod nams dbang drag) であり、母の名前は次旦普赤 (tshe brtan bu khrid) である。パンチェン・ラマ五世が生まれた後、「索南丹白堅贊 (bsod nams bstan pa'i rgyal mtshan)」と名付けられた。1668 年 1 月 3 日扎什倫布寺の堅贊吞布寝殿 (rgyal mtshan mthon po) において即位儀式を行い、ダライ・ラマ五世が法名「至尊化身洛桑意希貝桑波 (rje btsun sprul pa'i sku blo bzang ye shes dpal bzang po)」を賜った。その後、托布結地域の噶丹饒結林寺 (dga' ldan rab rgyas) 住職の洛桑丹増 (blo bzang bstan 'dzin) を経師として招聘し、經典仏法を学び始めた。1670 年、パンチェン・ラマ五世は拉薩に赴き、ダライ・ラマ五世に請願し、沙弥戒を受けた。その後、系統的に多くの経論を学び始めた。1679 年、パンチェン・ラマ五世は再び拉薩に行き、ダライ・ラマ五世から灌頂傳承を授かった。それから、『中觀論』『現觀莊嚴論』と『律經』等の学習と辯經を始めた⁽²⁰⁾。1684 年 11 月 2 日、扎什倫布寺の堅贊吞布寝殿において、衰波堅贊貝桑波 (mgon po rgyal mtshan dpal bzang po) 住職が堪布と経師を兼任して、パンチェン・ラマ五世に比丘戒を授けた⁽²¹⁾。

パンチェン・ラマ五世の影響力の拡大とともに、扎什倫布寺とその組織も新しい発展を遂げた。パンチェン・ラマ五世が寺院に対し大規模の修理をして、部分的な増築を行い、新たに大量の供物を増やした。例えば、金銅を用いて『菩提道次第論』傳承上師の尊像を造り、各仏殿の供物に対し詳細な登録を行った。パンチェン・ラマ五世がまた元来の『寺院規章勤務戒律条文』を修正・校訂し、寺院規則を規範化して、管理組織を完備し、膨大な僧団が正常に稼働することを維持した。パンチェン・ラマ五世の時代には、扎什倫布寺が兼ねて那塘寺 (snar thang chos sde) 等の後蔵地方の大寺院を管理していた。扎什倫布寺は、三大寺をはじめとした前蔵 (dbus ウー) 諸寺院および山南 (lho kha ロカ)・阿里諸地域の寺院とは緊密な関係を持ち、同時に、康地方・青海・モンゴル各部の格魯派との往来関係をも保っていた。毎年これらの地域から大勢の僧俗の官員や参拝信者が謁見に来て、大量の財施の寄進をした。扎什倫布寺はこれで大量の財物を貯蓄し、経済力が大いに発展し得た⁽²²⁾。

パンチェン・ラマ五世は前蔵の政教上層部とは往来が緊密にあった。パンチェン・ラマ五世は前後して、ダライ・ラマ五世および「真」「偽」のダライ・ラマ六世の三人と関係を結んでいる。例えば、自伝の第一から第七章には、パンチェン・ラマ五世とダラ

⁽²⁰⁾ 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(藏文)(上)、西藏藏文古籍出版社、2014 年 7 月、第 34 頁、53-56 頁、109-118 頁。

⁽²¹⁾ 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(藏文)(上)、西藏藏文古籍出版社、2014 年 7 月、第 168 頁。

⁽²²⁾ 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』(藏文)(上)、西藏藏文古籍出版社、2014 年 7 月、第 123-234 頁、即ち第五・六章の関連記述による。

イ・ラマ五世阿旺羅桑嘉措^{ガタロン・ロブサン・ギャムツォ}の間の往来関係が記されており、第八章から第十章までの部分の中には、パンチェン・ラマ五世が「真」「偽」のダライ・ラマ二人、即ち倉央嘉措^{ツァンヤン・ギャムツォ}と益西嘉措^{イェシエー・ギャムツォ}との関係が語られている。伝記の中には、パンチェン・ラマ五世の出行礼儀、送迎の盛況も記されている。例えば、毎回彼が扎什倫布寺^{タシルンポ}を離れて拉薩^{ラサ}に赴く途中では、いつもチベット地方政府、前・後蔵の政教官員、各宗派の寺院、高僧・活仏、僧俗百姓が彼を送迎する盛況は、他に例を見ないほどであり、送迎の駅ごとに準備手配が周到になされており、参上に来る信者は山海のように多かった。これらの活動は、パンチェン・ラマ五世がチベット民衆の中の崇高な地位と影響力を強化した。

他伝（下巻）（1732－1737）の中では、第一章の「前書き」は、パンチェン・ラマ五世の最前世などの化身を追述した以外、他の各章にもいくつかの重大事件が記されている。例えば、パンチェン五世と頗羅鼐^{ポラネ}やダライ・ラマ七世などのチベット地方上層部との往来が密接であった歴史は取り上げできる。その内、パンチェン・ラマ五世とダライ・ラマ七世との間はずっと親密な関係であった。ダライ・ラマ七世が康地方の泰寧・恵遠廟^{カム}に住していたうちにも同様であった。1733年、ダライ・ラマ七世が侍従格根^{ダゲン}（dge rgan）を扎什倫布寺に遣わし、問候・献礼をした。パンチェン・ラマ五世が侍従に托して、返信と贈り物を送った他、皇子多熱肯色親王^{ドレーケンセ}（lha sras rdo ras kheng se ching dbang）⁽²³⁾に書簡を送り、早めにダライ・ラマをチベットに帰らせるように願った。1735年、皇帝（雍正帝）がダライ・ラマのチベット帰還を許可し、パンチェン・ラマ五世が代理人を康地方までに遣わし、迎えに行かせた。ダライ・ラマが拉薩に着いた時、パンチェン・ラマ五世はまた司庫^{ボタラ}を布達拉宮に遣わして、挨拶をし、プレゼントを差し上げた。1736年、ダライ・ラマ七世とパンチェン大師が扎什倫布寺において面会した。伝記には、またパンチェン・ラマ五世の国師章嘉活仏^{チヤンキヤ}（lcang skya sprul pa'i sku）・帕巴拉活仏^{パタバラ}（'phags pa lha）等との往来様相も記してある〈*訳者注：章嘉活仏、正式名称は「章嘉呼圖克圖」（蒙文）〉。例えば、1735年、章嘉活仏^{チヤンキヤ}が扎什倫布寺^{タシルンポ}に来て、パンチェン・ラマ五世が章嘉活仏^{チヤンキヤ}に対し、法名「意希丹貝卓麦^{イェシエー・デンベ・ドンメ}（ye shes bstan pa'i sgron me）」を授けた。

パンチェン・ラマ六世は、かつてパンチェン五世のことを次のように評価した。「パンチェン・ラマ五世はその一生に渡り、仏教一特に黄教一を広げて、また扎什倫布寺の発展に貢献が大きい。パンチェン・ラマ五世は享年七十五年であった。その一生涯において、信徒を教化し、法輪を転じ、身語意三所依を広く行う事蹟は数え切れない。大師は隨時四聖行を持し守り、比丘僧の清浄律儀をする以外、精神上では少しも懈怠しなかった。大師は仏祖の恩を報ずるために、勤勉に仏事をなし、五千六百三十一人に比丘戒を伝授し、四千四百六十人に沙弥戒を伝授した。」⁽²⁴⁾

⁽²³⁾ 皇子多熱肯色親王、允礼のこと。康熙帝の第十七子、果親王（1697－1738）。

⁽²⁴⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』（藏文）（下）、西藏藏文古籍出版社、2014年7月、第426－427頁。

(三) チベットの内部衝突と外部関係の調停

パンチェン・ラマ五世の一生は、ちょうどチベット地域社会において衝突が多い時期であった。チベット地域には相次いでたくさんの事件が起こっている。

パンチェン・ラマ五世は、仏教者の慈悲と優れた智慧を以て、チベット内部の安定、地方の安寧、そして庶民の生活の安穩などの面を配慮し、積極的に各勢力集団の間を奔走して、或は調和し、或は慰め、或は教育・指導して、甚大な努力をした。例えば、第八から十章においては、パンチェン・ラマ五世が摂政桑結嘉措サンギェ・ギヤムツォと拉蔵汗ラサン・ハンとの間のトラブルに対して調停を行った経緯が記されている。摂政桑結嘉措サンギェ・ギヤムツォが拉蔵汗ラサン・ハンに殺された後、ラ蔵汗ラサン・ハンは聖旨を奉じて、ダライ・ラマ六世倉央嘉措ツァンヤン・ギヤムツォと摂政桑結嘉措サンギェ・ギヤムツォの妻子等を北京に押送した。第十一章の中では、準噶爾部ジュンガルがチベットを侵入した時期の、パンチェン・ラマ五世に行われた一連の調停活動が記されている。パンチェン・ラマ五世は自ら達木ダム（蔵北の当雄ダムシュン）に行つて、準噶爾の首領を一所懸命力説した。後に、準噶爾軍が拉薩ラサを占領し、パンチェン・ラマ五世は再び尽力して調停しようとしたが叶えなかった。拉蔵汗ラサン・ハンは殺され、その妻子をはじめとするモンゴル貴族が捕られた。パンチェン・ラマ五世は準噶爾軍の首領に会い、捕虜を少しでも優しく扱うように願った。1720 年になり、清軍がチベットに入った後、パンチェン・ラマ五世が人を遣わし、ダライ・ラマ七世の代理人と一緒に平逆將軍に書簡を送り、逮捕された準噶爾勢力に務めたことのある摂政達孜タクツェネと噶倫扎西孜巴カロンタシツェバ（bkra shis rtse pa）等の釈放と刑罰免除を申し出た。

自伝の第十二章から第十三章において、1723 年 9 月パンチェン・ラマ五世が青海の諸台吉タイジ（tha'i ji）の不和を知った後、代理人を遣わして、噶厦カシヤフ（bka' shag）⁽²⁵⁾の代表と一緒に青海に赴き、不和の調停に行かせた。1724 年 2 月、青海では「羅卜藏丹津謀反事件⁽²⁶⁾」が勃発した後、また代表を遣わし、書簡と伝言および贈り物を持させ、各方面に行つて調停をした。1727 年、拉薩ラサにおいて、噶倫内紛の「阿爾布巴の乱」が起こり、その後すぐ衛蔵地域ウー・ツァンにおいて戦乱が勃発した。パンチェン・ラマ五世は前後して、代理人を遣わして手紙と贈り物を持させて、何回も調停を行った。前・後蔵の兵士が江孜ギャンツェ（rgyal rtse）において戦い合っていた時、パンチェン・ラマ五世が薩迦法王サキヤ（sa skya chos rje）と扎什倫布寺司庫タシルンボに対し、共同で調停を行うように依頼し、戦う双方に対して、大

(25) 噶厦、当時のチベット語では「sde pa gzhung デパシュン」（中国語音写は「第巴雄」）または「bod gzhung プシュン（博雄）」と称され、即ちチベットの地方政府である。

(26) 羅卜藏丹津（生没年未詳）、清代青海のモンゴル和碩特部貴族の長。固始汗ゴシハンの孫。清康熙六十年（1721）、親王の身分で軍隊を率いて、清軍と一緒にチベット侵入の準噶爾軍を撃退した。戦乱を鎮めた後、清朝廷がチベットにおいて噶倫制を実施し、地方政権をチベット族自身に帰した。羅卜藏丹津ロブサン・テンジンは、和碩特部祖先がチベットの大部分地域を支配していた「覇業」を復讐できなかったため、雍正元年（1723）に青海を占領しようと企て、公然で当地のモンゴル諸部を扇動し叛乱を起したが清軍に破られ、新疆まで逃げて準噶爾部に身を寄せた。乾隆二十年（1755）、清軍が伊犁の乱を鎮めた時に捕まわれて京に押送された。死罪が免れたが軟禁された。

皇帝（雍正帝）の聖旨が到着する前までに各自撤退するように要求した。

パンチェン・ラマ五世は、また、自分自身のブータン・ネパール等の外国に対する影響力を利用し、チベット地方とブータン等の外部との争いを積極的に調停した。清の時代において、ブータンやネパール、シッキム等は既に清朝の藩属国になっていた。これらの藩属国は、中国のチベット地方とは密接な関係があった。パンチェン・ラマ五世は数回も人を遣わし、チベット地方とブータンの間の和議に務め、この伝統的な関係をより一層緊密にさせた⁽²⁷⁾。

（四）パンチェン・ラマ五世と扎什倫布寺・清朝廷との密接関係

パンチェン・ラマ五世の時代において、チベット地方と清朝中央政府間の関係がより一層緊密になり、国家の統一が守られた。国内の満・漢・蒙・蔵等の諸民族の関係も密接になり、各民族間の経済文化交流と民族団結が守られた。

パンチェン・ラマ五世がパンチェン・ラマ四世の転生として認定された後、康熙帝は欽差大臣を見舞いに遣わした。この後、ほぼ毎年清朝が欽差大臣を見舞いに派遣し、勅旨と貴重な贈り物を賜りに行かせた⁽²⁸⁾。同時に、扎什倫布寺からも代表者を北京に遣わし、謝恩と献上を行った。例えば、第七章の中には、康熙帝がパンチェン・ラマ五世を京へ招聘しようとしたが叶えなかった事由が詳しく記されている。1695年8月23日に至り、康熙帝が内齊托雲活仏（gnas bcu tho yon gyi sku skye）〈*訳者補注：「内齊托音」とも〉等のラマおよび大臣二名、筆帖式二名等を遣わし、勅旨と貴重な贈り物を持って行って、欽差大臣が大皇帝（康熙帝）からの、パンチェン大師を北京に招待するという口頭諭旨を伝えた。10月22日、欽差二人が扎什倫布寺に着いたが、この間、パンチェン・ラマ五世は、未だ痘症にかかったことはなく、天花を忌避すべき等の事情を申し出て、北京に赴くことを免除していただくように願った。1696年1月欽差大臣たちが出発して北京に帰る時、パンチェン・ラマ五世は再び皇帝に返信を送り、上京できない事情を陳べ、許しを求めた⁽²⁹⁾。

1720年、清軍がチベットに入り準噶爾部を駆逐した後、欽差が頻繁に扎什倫布寺に見舞いに来て、扎什倫布寺からも代理人を北京に遣わし、謝恩の書簡と貴重な贈り物を

⁽²⁷⁾ 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』（藏文）（上）、西藏藏文古籍出版社、2014年7月。関連記述は第七、八、十一等の章に参照。

⁽²⁸⁾ 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』（藏文）（上）第四章には、1677年チベット暦新年、パンチェン・ラマ五世が欽差大臣その他の漢地官員および後蔵の僧俗官員が楽しく一堂に会したことを記し、第五章には、1680年から1684年（1681年と1683年を除く）、清政府からは毎年欽差大臣を扎什倫布寺に遣わし、パンチェン・ラマ五世を見舞い、1684年においては、2月と5月、二回欽差大臣を派遣し、勅書と贈り物を賜ったという。

⁽²⁹⁾ 五世班禪羅桑益西著『五世班禪額爾德尼羅桑益西傳』（藏文）（上）、西藏藏文古籍出版社、2014年7月、第266—279頁。

献上した。パンチェン・ラマ五世と欽差大臣、チベット駐兵との往来は更に密接になり、扎什倫布寺と中央政府の関係が発展していった。

「他伝」(下巻)には、パンチェン・ラマ五世が康熙帝崩御のために厳かな廻向法会を行ったと記してある。雍正帝が即位し、欽差官員が康熙帝の追善供養及び雍正帝の即位の勅旨を宣下するために扎什倫布寺に來た。欽差は、内陸部で重版された北京版チベット大藏經(『丹珠爾』)をダライ・ラマ七世とパンチェン・ラマ五世に贈与した。1728年、欽差大臣が勅旨を読み上げ、扎什倫布寺以西、阿里地区に至るまでの地を褒賞の香火領としてパンチェン・ラマ五世に与えるという。しかし、パンチェン・ラマ五世は最終的に、拉孜・昂仁・彭措林の三つの宗しか受け入れなかった。このように、清朝廷はダライ・ラマの優勢にほぼ均衡させるほどの勢力を盛り立てたのである。

パンチェン・ラマ五世は晩年に、さらに清朝の中央政府の信頼を得た。1734年、パンチェン・ラマ五世は勅旨を奉じて、ラマ八名を選び、北京に遣わし赴任させた。駐藏大臣は、パンチェン大師が病気を患った事情を大皇帝(雍正帝)に詳しく奏上報告し、大皇帝が駐藏大臣に聖旨を下し、宮廷の贈り物をパンチェン大師に賜った。パンチェン・ラマ五世は、大皇帝に謝恩の書簡とお返しを送った。1735年、パンチェン・ラマ五世が雍正帝崩御の訃報を知り、すぐさまに弔問と廻向追善供養の法会を行った。1737年、乾隆帝が即位した後、パンチェン・ラマ五世は勅旨を奉じて、然堅巴(rab 'byams pa)〈*訳者補注:チベット仏教学位の一つ、廣通經義者の意〉洛桑絳央(blo bzang 'jam dbyang)とその従者を北京に遣わし、駐京ラマを務めさせ、大皇帝(乾隆帝)の政教侍従勤務を担当させたなどのことがあった。

1737年、パンチェン・ラマ五世は扎什倫布寺において入寂した。大皇帝(乾隆帝)は特別に勅使を扎什倫布寺に遣わし、パンチェン大師の法体前に様々な手厚い供物を献上した。

要するに、パンチェン・ラマ五世の一生涯を見通して、彼があゝの動乱の時代に生きていたことがまさに、彼の気高い徳と非凡な智慧があらわになったのであろう。彼は国家の統一と民族間の団結を守ることに一貫してぶれはなく、諸々の政教におけるトラブルを調停し、チベット地域の安定に不滅の貢献をし、チベット地方の僧俗百姓に愛され、清朝中央政府に深く信頼された。康熙五十二年(1713)康熙帝は彼に金冊・金印を賜り、正式に冊封して「班禪額爾德尼」とし、これよりパンチェン・エルデニ活仏の転生系統の地位が確立され、歴代のパンチェン・ラマが必ず冊封を受けることが制度となった。

四、余論

中国は統一的な多民族国家であり、諸民族間の政治・経済・文化などの面の交流が悠久的であり、大量の蔵漢歴史文献において相互交流の親密な関係が記してある。『パンチェン五世伝』などの一連の重要な蔵文文献は、チベット地方の社会・経済・文化等の

歴史事情を記しただけでなく、チベット地方と中原などの内陸部にある諸民族との往来交流関係も記している。より重要なのは、チベット地方と歴代の中央政府との往来関係、特に歴代の中央政府がチベット地方の政治・経済・文化等の諸方面における管理事情と施政施策を記していることである。以上の理由につき、この『パンチェン五世伝』という重要歴史人物の伝記の翻訳は、我々が清代のチベット地方史、チベット地方と国の内陸部の関係史を研究する際の重要な参考史料であると考ええる。

翻 訳 者 あ と が き

本論文は、馮智（^{ジェダシ}古塘・^{ロブタンブンツォク}洛丹平措）氏が2017年12月2日に龍谷大学にて開催された国際シンポジウム「チベットの宗教文化と梵文写本」での発表論文に基づき補正したものである。論文の翻訳校正につき、能仁正顕氏の多大なご協力、チベット語読みの方は^{ラモジョマ}拉毛卓瑪氏・^{クンサンチジョン}更藏切主氏、日本語ネイティブチェックの面では唐澤太輔氏からご助言をいただいた。この場を借りて、ご教示くださった皆様に対し感謝を申し上げる。

中国語原稿

藏文《五世班禪傳》的史料價值評述

馮 智（吉塘·洛丹平措）

摘要

為便於清初西藏地方政教歷史研究，筆者完成了藏文版《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》的漢譯工作。《傳》中記述了五世班禪一生的重要事蹟，尤其是涉及到當時西藏地方發生的一系列重大事件，其中不乏清初順治、康熙、雍正和乾隆幾代皇帝及清中央政府對西藏地方加以施政和管理的記載。本文分門別類地對《傳》中重要史料進行提煉、分析和評論，認為《傳》的史料價值極高，不僅是研究五世班禪生平，而且也是研究清初西藏地方史，以及西藏地方與清朝中央政府關係有重要價值的第一手史料。

關鍵詞：五世班禪、史料、評述

一、《五世班禪傳》的歷史背景與基本內容

（一）傳記的歷史背景

五世班禪額爾德尼羅桑益西（blo bzang ye shes, 1663—1737）是西藏歷史上一位頗有作為的重要人物，他是歷輩班禪中年壽很高的人，享年 74 歲。其《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（以下略稱《五世班禪傳》）所記述內容豐富，主要牽涉的歷史背景有以下幾個方面：

第一，這一特定的階段，特別是在五世達賴喇嘛阿旺羅桑嘉措（ngag dbang blo bzang rgya mtsho, 1617—1682 年）時期，是蒙古各部與西藏的政治、宗教、文化聯繫最為密切的時期，蒙古各部政教上層通過入藏朝禮，積極與格魯派（dge lugs pa）結納關係，衛拉特（a'o rod）的土爾扈特部（thor god）、準噶爾部（jun gar）、和碩特部（ho shod）與西藏格魯派的關係更是空前密切，影響深遠⁽¹⁾。其中，蒙古和碩特部控制西藏達 75 年（1642—1717）之久，而準軍佔據西藏也有兩年零九個月多。

第二，這一時期，是西藏地方社會矛盾四起的多事之秋。一系列的重大事件都在《五世班禪傳》裡得到了一定的反映。諸如西藏地方先後發生了蒙藏貴族權力之爭、真假達賴

⁽¹⁾ 清初西藏地方與蒙古各部的關係，清代大量的漢、藏、蒙、滿文等文獻和檔案均有記載，史料豐富。特別是藏文第三、四、五、六、七、八世《達賴喇嘛傳》以及第四、五、六世《班禪額爾德尼傳》中有大量的第一手史料記載。

喇嘛轉世之爭、準噶爾擾藏、噶倫（bka' blon）內訌的“阿爾布巴⁽²⁾之亂”及衛藏戰亂、不丹與西藏之間的邊境糾紛等諸多事件。

第三，這一時期，也是自 1642 年西藏地方派遣使者與崛起的清王朝建立聯繫後，與清中央政府關係不斷增強，清中央政府逐漸加強對西藏地方的管理，施政不斷完善的時期。

第四，這一時期，西藏格魯派和扎什倫布寺（bkra shis lhun po）取得巨大發展。例如從 1663 年開始，五世達賴喇嘛下令對西藏的格魯派寺院進行清查，並規定了格魯派寺院的常住僧額。規定布達拉宮（po ta la pho brang）為 50 名、扎什倫布寺為 3800 名、哲蚌寺（'bras spungs dgon pa）為 7700 名、色拉寺（se ra dgon pa）為 5500 名、甘丹寺（dga' ldan dgon pa）為 3300 名、昌都強巴林寺（chab mdo byams pa gling）為 2500 名、大昭寺（gtsug lag khang）為 500 名、小昭寺（ra mo che）為 500 名，等等。同時，西藏地方政府撥給各寺一定數目的莊園戶和田地。至康熙三十三年（1694），據統計，西藏境內各教派寺院共 1807 座，其中格魯派寺院占 534 座。在 95738 名僧人中，格魯派僧人就達 40187 人⁽³⁾。這些數字說明格魯派集團在這一時期取得了極大的發展。

（二）傳記的內容構架

《五世班禪傳》藏文長條書，共 400 葉（803 面）。《五世班禪傳》（藏文），分為上下部，上部著者為五世班禪羅桑益西，為自傳；下部著者為六世班禪羅桑貝丹益西（blo bzang dpal ldan ye shes），為他傳。

正如六世班禪在《五世班禪傳》（他傳）後記中所說：五世班禪大師的傳記，自水鼠年（1732 年）年滿七十歲時舉行神變節禮供等之前的事蹟，是由五世班禪大師自傳所寫。即五世班禪在 1663 年至 1732 年之前的事蹟為自傳（上部或上冊）的內容。這以後的五世班禪的事蹟，則由六世班禪額爾德尼所撰。即 1732 年至 1742 年間的內容為他傳（下部或下冊）。

依據《五世班禪傳》藏文長條書上下部的內容，西藏藏文古籍出版社出版了藏文《五世班禪傳》，並分為上下冊⁽⁴⁾。上冊即為《五世班禪傳》自傳的內容，共有十三章。下冊即為《五世班禪傳》他傳的內容，共有九章。目前筆者已將藏文版《五世班禪傳》（上下冊）翻譯成漢語，即將出版⁽⁵⁾。

二、《五世班禪傳》涉及的重大歷史事件

五世班禪額爾德尼羅桑益西所處的時代，正是康熙帝親政後開始統一中國大業的重要

(2) 阿爾布巴，即全名為“阿沛哇多吉傑布”（nga phod ba rdo rje rgyal po，？—1728）。

(3) 東嘎·洛桑赤列（gdong dkar blo bzang khri ms legs）著，陳慶英譯：《論西藏政教合一制度》，民族出版社，2001 年，第 56 頁。

(4) 2014 年 7 月，西藏藏文古籍出版社出版了《歷輩班禪大師傳記》叢書，共 12 冊，其中的第 3 冊和第 4 冊，即為《五世班禪羅桑益西傳》的上冊與下冊。

(5) 筆者從 2015 年初至 2016 年 9 月，用了不到兩年的時間，獨立完成了《五世班禪傳》（藏文版、上下冊）的漢譯，譯著近 50 萬字。

歷史時期。也是清朝中央政府開始掌控和逐漸全面管理西藏地方事務的重要歷史階段。一些重大的歷史事件反映於《五世班禪傳》之中。我們回看當時的歷史背景，特別是清朝中央政府的施政和逐漸推進對西藏地方的管理進程，就更能瞭解傳記的史料價值以及五世班禪的歷史作為和影響。

（一）冊封五世班禪

據《五世班禪傳》記載：康熙五十二年（1713 年）康熙帝正式冊封五世班禪為“班禪額爾德尼（pan chen a'er te ni）”，並按冊封五世達賴喇嘛之例，給予金冊、金印⁽⁶⁾。從此歷代班禪須由中央冊封成為制度。實際上，清朝從立國之始，便將結好蒙藏統治者和爭取蒙藏所崇敬的格魯派教主，以服務於清朝的統一大業作為一項戰略國策。順治十年（1652 年），順治帝敕封五世達賴為“所領天下釋教”的格魯派宗教首領，從此歷輩達賴喇嘛須經中央政府冊封成為一項制度。同時冊封固始汗為“遵行文義敏慧固始汗”⁽⁷⁾的政治首領，經此冊封西藏政教統治者正式歸順清朝。

（二）第巴桑結嘉措與拉藏汗、六世達賴的關係

從康熙二十一年（1682 年）五世達賴圓寂、第巴⁽⁸⁾桑結嘉措（sangs rgyas rgya mtsho）秘不發喪，直到 1720 年清軍進藏，其間西藏地方發生了一系列重大事件，這在《五世班禪傳》中都有相應記載。

其中，第巴桑結嘉措與拉藏汗（lha bsangs han）⁽⁹⁾的鬥爭最為突出。1703 年，拉藏汗在拉薩繼任和碩特部汗（ho shod han）王位，拉藏汗是個滿懷抱負、精力充沛的人，他“對於和碩特首領處於無權的狀況再也不忍心看下去”⁽¹⁰⁾，一心“想在西藏復興其祖先為本家族取得的統治”⁽¹¹⁾。拉藏汗瞭解到六世達賴喇嘛倉央嘉措（tshangs dbyangs rgya mtsho）厭學煩修，不願受比丘戒，甚至想退還沙彌戒給五世班禪以還俗，聲稱自己非達賴喇嘛的轉世，根本不聽第巴和五世班禪的勸教。六世達賴喇嘛的奇特行為正好被拉藏汗巧妙利用作為與第巴鬥爭的砝碼。後來，拉藏汗即位後上奏康熙帝稱：六世達賴行為不軌，請求廢除。

⁽⁶⁾ 五世班禪羅桑益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（上），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 496—497 頁。

⁽⁷⁾ 固始汗，即名“丹增卻吉結布”（bstan 'dzin chos kyi rgyal po）。

⁽⁸⁾ “第巴”，是藏文“sde pa”的譯音，為清初格魯派地方政權中代理達賴喇嘛行使政務管理的官員，又稱作“第斯”或“第悉”（sde srid）。第一任第巴索南饒丹由蒙古和碩特部固始汗所任命，固始汗死後，其諸子爭位，和碩特部勢力衰弱，第巴一職的任命趁機由五世達賴接管。

⁽⁹⁾ 拉藏汗是當時和碩特部在西藏的汗王。

⁽¹⁰⁾ 伯戴克著，周秋有譯：《十八世紀前期的中原和西藏》，西藏人民出版社，1987 年，第 12 頁。

⁽¹¹⁾ 杜齊著，李有義、鄧銳齡譯：《西藏中世紀史》，中國社會科學院民族研究所，1980 年，第 140 頁。

第巴與六世達賴之間的矛盾也成為拉藏汗巧妙利用的工具。1703 年的一天夜裡，達賴喇嘛率隨從數人夜行至八廓街，突遭十餘人襲擊，隨從中一人被殺。後六世達賴指責此事與第巴指使有關，要求第巴查交疑犯，事後達賴喇嘛遂與第巴交惡⁽¹²⁾。此後，第巴桑結嘉措與拉藏汗矛盾逐漸激化，康熙四十四年（1705 年），第巴桑結嘉措被拉藏汗所殺。次年（1706 年）康熙帝冊封拉藏汗為“翊法恭順王”。五世班禪派遣卓尼爾（mgon gnyer）噶欽（dka' chen）赴拉薩為拉藏汗獲封表示祝賀并送禮。同年拉藏汗奏廢六世達賴倉央嘉措，另立益西嘉措（ye shes rgya mtsho）為“真”六世達賴，並奉旨押解“假”達賴喇嘛倉央嘉措送京，倉央嘉措途經青海湖病逝⁽¹³⁾。康熙四十九年（1709 年），清廷方正式冊封拉藏汗所立益西嘉措為六世達賴喇嘛。

（三）用兵西藏，驅逐準噶爾部

《五世班禪傳》中記載了這一歷史事件，戰事頻發，五世班禪積極從中調停⁽¹⁴⁾，擁護清軍進藏驅逐頑敵。1717 年，西藏被準噶爾部佔據，拉藏汗被殺，益西嘉措被囚禁。1718 年清軍進藏驅逐準噶爾部，不幸于黑河（nag chu 那曲）全軍覆沒。1720 年初，康熙帝授命皇十四子允禵為撫遠大將軍坐鎮西寧，指揮清軍從四川、青海進藏驅逐準噶爾軍出西藏。與此同時，至康熙五十九年（1719 年），康熙帝正式冊封格桑嘉措（bskal bzang rgya mtsho）為“六世達賴喇嘛”，並命延信將軍護送至布達拉宮坐床，同時廢黜拉藏汗所立的六世達賴益西嘉措。

（四）行政管理與駐兵西藏

據《五世班禪傳》記載，1720 年 10 月 6 日，清軍將領和七世達賴喇嘛、青海丹增王（bstan 'dzin dbang，即羅卜藏丹津（blo bzang bstan 'dzin）親王）等派遣代表來到扎什倫布寺，請求大師前往拉薩。10 月 10 日，五世班禪到布達拉宮日光殿首次同七世達賴喇嘛晤面。11 月 5 日，為七世達賴喇嘛傳授沙彌戒，取法名為“洛桑格桑嘉措”（blo bzang bskal bzang rgya mtsho）。此間，五世班禪拜見了延信等清軍將領，並為第悉達孜鼐（全名 stag rtse ba lha rgyas rab brtan）等效力過準噶爾的罪人求情，免予懲罰⁽¹⁵⁾。清軍平定西藏後，清朝開始直接施政於西藏，徹底廢除蒙古汗王與第巴制，選定在“逐準保藏”戰爭中有功的藏族官員康濟鼐（全名 khang chen nas bsod nams rgyal po）、阿爾布巴、隆布鼐（全名 lum pa ba bkra shis rgyal po）、扎爾奈（sbyar ra ba blo gros rgyal po）等四人為噶倫，組成西藏

⁽¹²⁾ 《康熙朝滿文朱批奏摺》，議政大臣鄂飛等康熙四十四年十二月二十六日奏摺。

⁽¹³⁾ 《清聖祖實錄》卷二二七，康熙四十五年十二月庚戌條。據此條記載，當時清廷派駐西寧的大喇嘛商南多爾濟（phyag na rdo rje）親自向清廷報告“假達賴喇嘛，行至西寧口外病故”，理藩院且題奏“行文商南多爾濟將其屍骸拋棄”，康熙從之。

⁽¹⁴⁾ 五世班禪羅桑益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（上），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 524—529 頁。

⁽¹⁵⁾ 五世班禪羅桑益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（上），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 559—564 頁。

地方政府，共同管理西藏事務。同時採納大將軍允禩等大臣疏奏，清廷命四千兵丁駐防西藏⁽¹⁶⁾。不過鑒於西藏政局很快趨向穩定，僅一年左右，除在察木多（chab mdo, 今昌都）等處留兵一千駐防之外，其餘駐藏兵丁奉命內撤。此後清軍駐藏形成制度。

（五）設立駐藏大臣，加強西藏事務管理

《五世班禪傳》涉及的又一重大事件是清朝設置駐藏大臣。清朝曾於康熙四十八年（1707 年）派遣侍郎赫壽入藏，“協同拉藏（汗）辦理事務”，這被認為是清朝設置駐藏大臣的先聲。1727 年，清朝派遣內閣學士僧格（seng ge）、副都統馬喇（m'a la）入藏，協助達賴喇嘛、康濟鼐等辦事，從此駐藏大臣正式設置。1727 年（雍正五年），西藏發生了阿爾布巴之亂，8 月，阿爾布巴、隆布鼐、扎爾奈等人謀殺康濟鼐，頗羅鼐（全名 pho lha nas bsod nams stobs rgyas）起兵反抗，雙方為爭奪權力展開了歷時近一年的衛藏戰爭。1728 年 7 月，頗羅鼐率兵攻入拉薩，奪取西藏地方統治權力。同時清朝再次用兵西藏平息內亂，這是對西藏的第三次用兵。

據《五世班禪傳》記載：“為平息衛藏戰亂，雍正帝派遣欽差阿黎安班（a' li aim pa，按：指清軍統帥查郎阿（khra lang a'））等率領清兵數千人到達拉薩。欽差大臣特派加爾果齊（rjar go chi，按：侍衛）和馬老爺（按：為朝廷駐藏官員，副都統馬喇）到扎什倫布寺迎請大師前往拉薩聽旨。啟程前往拉薩，在布達拉宮與七世達賴喇嘛會晤。”“派卓尼爾薩奎巴（sa 'khon pa）去向欽差們為第巴噶倫等人求情，但法度森嚴，無法挽回。”⁽¹⁷⁾

清朝平息阿爾布巴之亂後採取的措施，除了加強駐藏官兵規模之外，還對西藏的政制作了一些調整。主要有：

一是對頗羅鼐的嘉獎。事後雍正帝先後晉封頗羅鼐為“貝子”和“貝勒”，總理全藏事務。1740 年，因頗羅鼐防禦準噶爾部來犯有功，乾隆帝晉封頗羅鼐為“郡王”，這是清朝對西藏上層的最高封爵。頗羅鼐“遵奉諭旨”，維護統一，清朝中央政府與西藏地方的關係得到了進一步的鞏固和發展。《五世班禪傳》記載了五世班禪與頗羅鼐的密切來往關係。

二是鑒於噶倫內訌以及七世達賴之父干預政事，清朝將七世達賴移往康區泰寧（mgar thar），建惠遠廟使其駐禪，又詔七世達賴之父到北京述職，把七世達賴權力控制於宗教事務之內。《五世班禪傳》記載：“不久，七世達賴喇嘛奉旨從布達拉宮啟程前往理塘（li thang），派卓尼爾赴拉薩給達賴喇嘛送去慰問信和各種禮物”⁽¹⁸⁾。七世達賴奉旨於 1728

⁽¹⁶⁾ 康熙六十年（1721 年）二月，大將軍允禩疏奏：“西藏雖已平定，駐防尤屬緊要。現今留駐彼處者，扎薩克蒙古兵五百名、額駙阿寶兵五百名、察哈爾兵五百名、雲南兵三百名、四川兵一千二百名，以公策旺諾爾布總統管轄”。三月，清政府再從雲南、四川各調兵五百名入藏，這樣共計有四千兵丁駐防西藏。（《清聖祖實錄》卷 291，頁 11 至 12）

⁽¹⁷⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（下），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 126—130 頁。

⁽¹⁸⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（下），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 134 頁。

年 11 月移住康區，直到 1735 年才返回拉薩。

三是清朝又採取分而治之政策，下令將康定（mda' rtse mdo, 打箭爐）、理塘、巴塘（'ba' thang）等地劃歸四川管理；將中甸（rgyal thang）、阿敦子（'jol）、維西（'ba' lung）等地劃歸雲南管理；將扎什倫布以西至阿里（mnga' ris）地區交由五世班禪管理，但五世班禪只接受了三個宗（縣）的管轄權。對此，《五世班禪傳》記載：“清朝官員宣讀聖旨，將扎什倫布寺以上岡底斯山以下的所有地方（按：即指後藏及遠至岡底斯山（kangs ti se）的一片地方）全都賞給班禪作為香火地。對此，大師一再表示不願接受，因不可抗旨，最後只得接受拉孜（lha rtse）、昂仁（ngam ring）、彭措林（phun tshogs gling）三個宗。”不久，“司庫（phyag mdzod）等人辦理大皇帝（雍正皇帝）新賜的香火地各宗頭人移交及接收手續”⁽¹⁹⁾。

總之，大凡清初中央政府對西藏地方的重大施政舉措，都在《五世班禪傳》中得到了一定的記載和反映，因此《五世班禪傳》是研究清代中央政府治藏的第一手重要資料。

三、《五世班禪傳》的其他史料價值

（一）研究扎什倫布寺的第一手材料

《五世班禪傳》史料價值極高，依據傳記，概況而言，它不僅是研究五世班禪額爾德尼一生的第一手重要史料，也是研究當時扎什倫布寺乃至後藏政治、社會、經濟、宗教、文化等多方面歷史狀況的重要材料。五世班禪時期，對於扎什倫布寺自身的發展歷史，包括寺院建制、學經制度、寺院經濟、寺院擴建、文物（佛像佛經佛塔和壁畫）收藏創造等寺院文化，以及寺院社會關係（包括內部關係和外部關係）等方面提供了重要的史料。甚至對於清初西藏地方的社會狀況和歷史發展，以及扎什倫布寺、西藏地方與周邊地區的交往關係，扎什倫布寺、西藏地方與清朝中央政府的關係等方面的研究，都具有重要的參考價值。

（二）研究五世班禪生平事蹟的重要史料

《五世班禪傳》是研究五世班禪生平的第一手資料。縱觀他的一生，他的閱歷極為豐富，政教事蹟極為突出。主要體現有以下方面：

五世班禪一生勤修不止，廣做法行，著作等身，弟子無數，推動扎什倫布寺的發展壯大，影響于格魯派的深遠傳播。

1663 年 7 月 15 日，五世班禪出生于後藏托布結（thob rgyal）春倉村（brul tshang）。父名夏仲索南旺札（zhabs drung bsod nams dbang drag），母名次旦普赤（tshe brtan bu khrid）。五世班禪出生後，取名為索南丹白堅贊（bsod nams bstan pa'i rgyal mtshan）。1668

⁽¹⁹⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（下），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 128—129 頁。

年1月3日在扎什倫布寺堅贊吞布寢殿(rgyal mtshan mthon po)舉行了坐床典禮,五世達賴喇嘛賜法名為“至尊化身洛桑意希貝桑波”(rje btsun sprul pa'i sku blo bzang ye shes dpal bzang po)。隨後聘請托布結噶丹饒結林寺(dga'ldan rab rgyas)住持洛桑丹增(blo bzang bstan 'dzin)為經師,開始學經習法。1670年,五世班禪赴拉薩請五世達賴喇嘛授了沙彌戒。之後,開始系統學習諸多經論。1679年,五世班禪再次赴拉薩拜見五世達賴喇嘛獲得灌頂傳承(dbang bkur)。此後,開始《中觀論》和《現觀莊嚴論》以及《律經》等學習和辯經⁽²⁰⁾。1684年11月2日,在扎什倫布寺堅贊吞布寢殿,由袞波堅贊貝桑波(mgon po rgyal mtshan dpal bzang po)住持兼任堪布和經師,為五世班禪授了比丘戒⁽²¹⁾。

隨著五世班禪的影響力的擴大,扎什倫布寺及其建制也有了新的發展。五世班禪對寺院作了大規模修繕,並進行部分擴建,新增大量供物,如用鍍金銅鑄造《菩提道次第論》傳承上師的尊像,對各個佛殿的供物作了詳細登記。五世班禪還對原有的《寺院規章勤務戒律條文》進行了修改,軌範寺院規章和完善管理機制,維持了龐大的僧侶集團正常運作。五世班禪時期,扎什倫布寺兼管那塘寺(snar thang chos sde)等一些後藏(gtsang)大寺。扎什倫布寺與三大寺等前藏(dbus)寺院,以及山南(lho kha)、阿里各地寺院關係密切。同時與康區、青海、蒙古各部的格魯派保持往來。每年來自這些地方的大量僧俗官員、朝佛香客前來謁見,捐獻了大量信財。扎什倫布寺由此積累了大量財富,經濟實力取得巨大發展⁽²²⁾。

五世班禪與前藏政教上層交往密切。五世班禪先後與五世達賴喇嘛、三個“真假”六世達賴喇嘛建立了關係。例如,自傳第一章至第七章裡記載有五世班禪與五世達賴喇嘛阿旺羅桑嘉措(ngag dbang blo bzang rgya mtsho)之間的往來關係;第八章至第十章裡講述五世班禪與“真假”兩個六世達賴喇嘛即倉央嘉措和益西嘉措的關係;第十一章以後主要記載了五世班禪同七世達賴喇嘛格桑嘉措的交往,等等。傳記裡記載了五世班禪的出行禮儀、迎送盛況等。如每每他離開扎什倫布寺啟程前往拉薩沿途,西藏地方政府、前後藏政教官員、各派寺院、高僧活佛、僧俗黎民百姓對他的迎送盛況空前,接送每站周密安排細緻,朝拜信眾如山似海。這些活動都加深了五世班禪在西藏民眾中的崇高地位和影響力。

在他傳(下冊)(1732—1737)裡,除了第一章“引言”追述五世班禪的最前世等化身之外,其餘各章亦記載了一些重大事件,例如,五世班禪與頗羅鼐、七世達賴喇嘛等西藏地方政府上層交往密切的歷史。其中,五世班禪與七世達賴喇嘛之間一直關係親密。即使是在七世達賴喇嘛住錫康區泰寧(mgar thar)惠遠廟期間也如此。1733年七世達賴喇嘛派遣卓尼爾格根(dge rgan)來到扎什倫布寺問候獻禮。五世班禪托卓尼爾帶去回信和禮

⁽²⁰⁾ 五世班禪羅桑益西著:《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》(藏文)(上),西藏藏文古籍出版社,2014年7月版,第34頁、53—56頁、109—118頁。

⁽²¹⁾ 五世班禪羅桑益西著:《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》(藏文)(上),西藏藏文古籍出版社,2014年7月版,168頁。

⁽²²⁾ 五世班禪羅桑益西著:《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》(藏文)(上),西藏藏文古籍出版社,2014年7月版,第123—234頁即第五、六章相關記載。

物，並帶信給皇子多熱肯色親王（lha sras rdo ras kheng se ching dbang）⁽²³⁾，呈請奏准達賴喇嘛儘快返藏。1735 年，皇帝恩准達賴喇嘛返藏，五世班禪派遣代表前往康區迎接。達賴喇嘛抵達拉薩時，又派遣司庫前往布達拉宮謁見和獻禮問候。1736 年，七世達賴喇嘛和班禪大師在扎什倫布寺相會。傳記還記載了五世班禪與國師章嘉活佛（lcang skya sprul pa'i sku）、帕巴拉活佛（'phags pa lha）等的交往情形。如 1735 年，章嘉活佛前來扎什倫布寺看望，五世班禪給章嘉活佛取法名為“意希丹貝卓麥”（ye shes bstan pa'i sgron me）。

六世班禪大師曾這樣評價：“五世班禪大師終其一生，對佛教、特別是黃教廣為弘揚，尤其是對扎什倫布寺的發展貢獻巨大。五世班禪大師享年七十五歲。在他一生裡，教化徒眾，轉動法輪，廣行身語意三所依的事蹟數不完道不盡。大師隨時持守四聖行，他除了只做比丘僧的清淨律儀之外，思想絲毫不為懈怠。大師為了報恩佛祖，勤做佛事，為五千六百三十一人傳授了比丘戒，為四千四百六十人傳授了沙彌戒。”⁽²⁴⁾

（三）調解西藏內部矛盾及與外部的關係

五世班禪的一生恰逢西藏地方社會矛盾四起的多事之秋，西藏地方先後發生了諸多事件。

五世班禪以佛家慈悲和高超智慧，從西藏社會內部穩定、地方安寧和百姓休和著想，積極奔走於各勢力集團之間，或調解、或安撫、或開導，做了巨大努力。如在第八至十章裡，記載了五世班禪對第巴桑結嘉措與拉藏汗之間的矛盾進行調解的經過。第巴桑結嘉措被拉藏汗殺死後，拉藏汗奉旨將六世達賴倉央嘉措及第巴桑結嘉措的妻、子等押送北京。在第十一章裡，記載了準噶爾擾藏期間五世班禪所進行的一系列調解活動。甚至五世班禪親自前往達木（'dam，藏北當雄）苦苦勸說準噶爾首領。後準軍佔據拉薩，五世班禪再次盡力調解，無果。拉藏汗被殺死，其妻兒為首的蒙古貴族被擒。五世班禪會見準軍首領要求從輕發落被俘人員。至 1720 年，清軍進藏後，五世班禪又派人同七世達賴喇嘛的代表致信平逆將軍，請求釋放被逮捕的為準噶爾效過勞的第悉達孜鼐、噶倫扎西孜巴（bka' blon bkra shis rtse pa）等多人，要求免予懲罰。

在自傳第十二至十三章裡，記載了 1723 年 9 月五世班禪在得知青海諸台吉（tha'i ji）不和後，便派遣代表隨同噶廈（bka' shag）⁽²⁵⁾代表一起前往青海調解諸台吉不和。1724 年 2 月青海爆發羅卜藏丹津叛亂事件⁽²⁶⁾後，又派代表攜帶書信、口信及禮物前往對各方進

⁽²³⁾ 皇子多熱肯色親王：指允禮，康熙皇帝第十七子，果親王（1697—1738）。

⁽²⁴⁾ 五世班禪羅桑益西、六世班禪羅桑貝丹益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（下），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 426—427 頁。

⁽²⁵⁾ 噶廈，當時藏文稱作“sde pa gzhung”（譯音為“第巴雄”）或“bod gzhung”（博雄），即西藏地方政府。

⁽²⁶⁾ 羅卜藏丹津（生卒年不詳）清代青海蒙古和碩特部貴族首領。固始汗之孫。清康熙六十年（1721）以親王身份率兵與清軍一起擊潰入侵西藏的準噶爾兵。亂平後，清廷於西藏實行噶倫制，地方政權交由藏民族自己管理。羅卜藏丹津因恢復祖先和碩特部在大部分藏區的“霸業”無望等，于雍正元年（1723）陰謀割據青海，公開煽動當地蒙古各部發動叛亂，

行調和。1727 年，拉薩發生噶倫內訌的“阿爾布巴之亂”，隨即衛藏（dbus gtsang）爆發戰亂。五世班禪先後派遣代表攜帶信件和禮品進行多次調解。前、後藏兵雙方在江孜（rgyal rtse）交戰，五世班禪請薩迦法王（sa skya chos rje）與扎什倫布寺司庫一同調停，要求雙方在大皇帝（雍正皇帝）聖旨未到之前，各自撤退。

五世班禪利用他自己對不丹、尼泊爾等外界的影響，積極調處西藏地方與不丹等外部的糾紛。有清一代，不丹、尼泊爾、錫金等已成為清朝的藩屬國。這些藩屬國與中國西藏地方關係密切，五世班禪數次派人辦理西藏地方與不丹之間的和議事務，進一步密切了這種傳統關係⁽²⁷⁾。

（四）五世班禪、扎寺與清廷的密切關係

五世班禪時期，進一步密切了與清朝中央政府之間的關係，維護了祖國統一；密切了與國內滿、漢、蒙、藏等各民族關係，維護了各民族之間的經濟文化交流和民族團結。

五世班禪被認為四世班禪的轉世後，康熙帝派遣欽差前來看望。此後幾乎每年都派遣欽差前來看望，賜予敕書和貴重賞禮⁽²⁸⁾。同時扎什倫布寺也派遣代表進京謝恩和貢物。如第七章裡詳細記載了康熙帝延請五世班禪晉京未果的經過。直至 1695 年 8 月 23 日，康熙帝派內齊托雲活佛（gnas bcu tho yon gyi sku skye）等喇嘛、兩位大臣和兩名筆帖式等攜帶敕書和貴重禮品，欽差轉達請班禪大師赴京的大皇帝（康熙皇帝）口諭。10 月 22 日，欽差兩人抵達扎什倫布寺。此間，五世班禪就未出過痘、避諱天花等情，提出免於赴京的申請。1696 年 1 月，欽差們啟程回京時，再次向皇帝復函陳述不能赴京一事。請求寬恕⁽²⁹⁾。

1720 年，清軍進藏驅逐準噶爾部後，欽差頻繁前來扎什倫布寺看望，扎寺派遣代表赴京進獻謝恩信及貴重禮物。五世班禪與欽差、駐藏官兵的來往更為密切，扎什倫布寺與中央政府的關係取得發展。

在“他傳”（下冊）裡記載，五世班禪為康熙皇帝駕崩舉行隆重的回向法會。雍正帝即位，欽差官員為康熙帝駕崩超度和雍正帝登基宣旨來到扎寺。欽差將內地重印的北京版經文（《丹珠爾》）帶來送給七世達賴喇嘛和五世班禪。1728 年，欽差大臣宣讀聖旨，將扎什倫布寺以西直到阿里地區賞給班禪作為香火地。但五世班禪最後只接受了拉孜、昂仁、彭措林三個宗。這樣，清廷樹立了一個可平衡前藏達賴喇嘛的優勢的力量。

被清軍擊敗，逃至新疆投奔準噶爾部。乾隆二十年（1755），清軍平定伊犁時將其俘獲，解京赦免死罪軟禁。

⁽²⁷⁾ 五世班禪羅桑益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（上），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，相關史料見第七、八、十一等各章內容記載。

⁽²⁸⁾ 五世班禪羅桑益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（上）第四章記載，1677 年藏曆新年，五世班禪同欽差等漢地官員以及後藏僧俗官員歡聚一堂。第五章記載，從 1680 年至 1684 年（除 1681 年和 1683 年之外），每年清朝政府都派遣欽差到扎什倫布寺看望。1684 年則在 2 月和 5 月兩次派遣欽差前來看望，頒給敕書和禮品。

⁽²⁹⁾ 五世班禪羅桑益西著：《五世班禪額爾德尼羅桑益西傳》（藏文）（上），西藏藏文古籍出版社，2014 年 7 月版，第 266—279 頁。

五世班禪晚年更加得到清朝中央政府的信任。1734 年，遵奉諭旨，五世班禪選派八名喇嘛派往北京任職。駐藏大臣將班禪大師患病詳情向大皇帝（雍正皇帝）作了奏報，大皇帝降旨駐藏大臣，頒賜宮廷禮品。五世班禪向大皇帝寄了謝恩回信和回禮。1735 年，五世班禪得知雍正皇帝駕崩的噩耗後，立即為雍正皇帝駕崩舉行弔唁和回向超度法會。乾隆皇帝登基後，1737 年，遵奉諭旨，派遣然堅巴（rab 'byams pa）洛桑絳央（blo bzang 'jam dbyang）及隨從前往北京擔任駐京喇嘛，並擔任大皇帝（乾隆皇帝）的政教侍勤，等等。

1737 年，五世班禪在扎什倫布寺圓寂，大皇帝（乾隆皇帝）特派欽差官員來到扎什倫布寺向班禪大師法體前奉送各種祭供厚禮。

總之，縱觀五世班禪的一生，正因為他處於那個動盪紛亂的時代，才顯示出他高尚的品德和不凡的智慧，他始終堅定不移地維護祖國的統一和民族的團結，調解了諸多的政教矛盾，為藏區的穩定作出了突出的貢獻，贏得了藏區僧俗百姓的愛戴，也深受清朝中央政府的信任。康熙五十二年（1713 年）賜他金冊、金印，正式冊封為“班禪額爾德尼”，從此確立了班禪額爾德尼活佛轉世系統的地位，歷代班禪都須由中央冊封成為一項制度。

四、余論

中國是一個統一的多民族國家，各民族之間的政治、經濟特別是文化方面的交流源遠流長，大量的藏漢歷史文獻都記載了雙方交往的親密關係。《五世班禪傳》等一批重要的藏文文獻，不僅記載了西藏地方的社會、經濟和文化等歷史狀況，而且記載了西藏地方與中原等內地各民族的交往交流關係，更為重要的是記載了西藏地方與歷代中央政府的交往關係，特別是歷代中央政府對西藏地方的政治、經濟和文化諸方面的管理和施政舉措，因此《五世班禪傳》這一重要歷史人物傳記的翻譯是我們研究清代西藏地方歷史、西藏地方與祖國內地關係史的重要參考史料。